

社説

豪雨災害の備え

台風や豪雨が心配な季節が
去った。今年も7、8月を中
心に、東北各地で大雨による
被害が相次いだ。

人的被害は少なかった。ほ

河北新報社と中国新聞社
(広島市) は5日、広島市安
佐南区山本学区で防災ワー
クショップ「むすび塾」を共催

覆う土砂。その光景は震災と重なる。広島市全体で75人が亡くなり、山本学区でも幼い兄弟が犠牲になった。

う。ワークシヨップでは、要配慮者の自主避難をはじめ、日没前の早めの判断と行動を誓い合った。

山本学区は昨年8月も大雨と土石流に見舞われた。当時を振り返った複数の参加住民から「避難開始のタイミ

もしも、夜間や大雨で避難のタイミングを逸したなら、家の2階や、山側から谷側の部屋に移動する。広島土砂災

木の裂ける音、石がぶつかる音も、土砂災害の前兆として知られる。普段から山の音においなどに耳や鼻を向けておこう。平時と比べることができると、異常事態への感度は高まる。

つとする半面、それで済ませ
ていいものかとも思う。もう
少し雨脚が強かったら、もう
少し長く降り続いていたら、
もっと犠牲者が出たかもしれ
ない。隠れたリスクを見落と
していなかっただろうか。

した。
安佐南区の地名に聞き覚えのある人は、2014年8月

土石流の常襲地域に学ぼう

した。

東日本大震災後、被災地では、多くの被災者が海の近くから山のそばに生活拠点を移した。もとより内陸部では、

の広島土砂災害の記憶だろう。大雨で山の谷に沿って大量の土砂が一気に流れ落ち、麓の住宅街を襲った。

里山、山裾で暮らしている人が多い。土砂災害の備えを改

土石流は山津波とも呼ばれる。大破した家、辺り一面を

が難しいこの声が上がった。地震、津波と違い、豪雨災害は危険が迫るまで時間がかかるとの時点で逃げ始めるのか、前もって家族と決めておくことが重要になる。

害では、1階は土砂で埋まったものの、2階に避難して助かったケースがあった。

自分の命は自分で守るのが災害対応の基本。避難指示が間に合わないこともある。広

夜に災害リスクが高まる場合もある。暗く、大雨が降る中では、避難自体が危険を伴

島では、地鳴りや腐った土のにおいから異変を察知し、間一髪で難を逃れた人がいた。

ワークシヨップでは、日頃の健康・体力づくりと近所付き合いの大切さも再確認した。要配慮者が自ら頑張つて玄関先まで出ることができれば、気心の知れた住民の支援が受けやすくなり、速やかな避難にもつながる。

災害の激甚化が叫ばれて久しい。震災の教訓を伝承、発信すると同時に、異なる災害、異なる被災地の教訓も学び、将来の災害で犠牲を少しでも減らしたい。

第108回中国新聞社と共催 @広島・山本学区

むすび塾

東日本大震災の教訓を将来の災害への備えに生かすため、河北新報社は5日、108回目の防災ワークショップ「むすび塾」を広島市安佐南区の山本学区で開いた。初めて中国新聞社と共催。要配慮者の支援を想定したミニ避難訓練を実施した後、土砂災害を念頭に語り合い、備えの課題と解決のヒントを探った。地方紙連携の共催むすび塾は2014年に開始し、17回目。

傾斜、細道豪雨時どうする

防災ワークショップ「むすび塾」の語り合いは山本集会所で行い、山本学区の住民、広島経済大の学生、東日本大震災の語り部、助言者の12人が参加した。

山本学区は広島市中心部から5キロ北に位置する。住宅の背後地には武田山（標高410メートル）があり、傾斜地に並ぶ家屋の間を細い道が縫うように通っている。2014年8月、21年8月に豪雨による土砂災害が発生した。

参加者が見守ったミニ避難訓練の振り返りで「道が狭く路面も悪い坂を車いすで下りるのは時間がかかる。車避難を検討する必要がある」「夜は暗く、ふたない側溝に落ちる危険もある」といった意見が出た。

自主防災会連合会会長の岡野康紀さん(63)は「地震でブロック塀が倒れたら通れない。広い道優先で避難した方がいいと分かった」と語った。子育てサークル「MaMaぼっけ」代表の坂本牧子さん(61)は「ベビーカーの避難も側溝や歩道の段差が危ない」と述べた。

避難について山本学区社会福祉協議会福祉委員の田中啓子さん(74)は「避難は勇気と決断が必要。いざとなったら、と不安を口にしていた」と述べた。

語り部として参加した左巻市民生委員児童委員協議会副会長の蟻坂隆さん(72)は「避難所に行きにくい」との声が上った。

他の住民からも「避難開始のタイミングが分からない」「避難所に行きにくい」との声が上った。

語り部として参加した左巻市民生委員児童委員協議会副会長の蟻坂隆さん(72)は「避難所に行きにくい」との声が上った。

語り部として参加した左巻市民生委員児童委員協議会副会長の蟻坂隆さん(72)は「避難所に行きにくい」との声が上った。

語り部として参加した左巻市民生委員児童委員協議会副会長の蟻坂隆さん(72)は「避難所に行きにくい」との声が上った。

東日本大震災の教訓を将来の災害への備えに生かすため、河北新報社は5日、108回目の防災ワークショップ「むすび塾」を広島市安佐南区の山本学区で開いた。初めて中国新聞社と共催。要配慮者の支援を想定したミニ避難訓練を実施した後、土砂災害を念頭に語り合い、備えの課題と解決のヒントを探った。地方紙連携の共催むすび塾は2014年に開始し、17回目。



難所で不自由な思いをする障害者や足腰の弱い高齢者が行きたがらない。今も悩んでいる。訪問活動の中で、一緒に避難しようという声が出ていた。語り部を務めた石巻市の小規模多機能型居宅介護「めだかさん45」は高齢者の避難に「つながる工夫として、施設で日頃から行っている立ち上がり練習や足腰体操を紹介。日常の習慣になっている。自分で立てると後の行動がスムーズになる」と語った。

安佐南区にある広島経済大は災害を知り未来へつなぐ「プロジェクト」で、学生が被災地支援や地域の防災活動に取り組み、訓練で車いすの人を介助した3年北本峻也さん(21)は「地域の人の役に立たいけれど、住民との接点がない」と打ち明けた。

助言者として参加した減災・復興支援機構専務理事の宮下加奈さん(53)は「若者が地域に活動する機会を増やしたい」と述べた。

活発な質疑応答に加え、参加者は広島市当地の「百歳体操」や、めだかグループの足腰体操を体験したほか、唱歌「ふるさと」を一緒に歌い、親交を深めた。

社会福祉協議会会長の小堀昭男さん(71)は「宮城の語り部と広島市の住民が自然災害という共通のテーマで気持ちを通わせ、防災の知恵を出し合った。体操のような何げない取り組みが防災に役立つと分かったので、活動をさらに進めたい」と決意を語った。

減災・復興支援機構専務理事の宮下加奈さん(53)は「若者が地域に活動する機会を増やしたい」と述べた。

減災・復興支援機構専務理事の宮下加奈さん(53)は「若者が地域に活動する機会を増やしたい」と述べた。

■むすび塾に参加して

●消防団と連携を 避難訓練をしたのは初めてだったが、気付くことが多く、28の自治会に広げてやってみる価値があると思った。炊き出しやテントの設置訓練と合わせて取り組みたい。昨年の大雨では、消防団の声がけで避難する人が増えた。今後も消防団との連携が欠かせない＝社会福祉協議会会長・小堀昭男さん(71)



●避難対策考える 山本学区は人口が多い。避難者が避難所に殺到すると運営が難しくなる。ブロック塀も多く、地震で倒れる可能性があるため、避難経路を含め対策を考えたい。昨年の大雨では、避難所を2週間開設した。学生が率先してトイレ掃除をしてくれて、うれしかった＝自主防災会連合会会長・岡野康紀さん(63)



●手助けをしたい ふたのない水路やブロック塀など危険箇所がいっぱいあった。歩道のでこぼこも気になった。夜は暗く、車いすやベビーカーでの避難は困難だ。子育て世代や高齢者の手助けをしたい。独りぼっちをつくらないように、日頃のつながりが大事だと改めて感じた＝子育てサークル「MaMaぼっけ」代表・坂本牧子さん(61)



●早めの行動重要 車いす避難の訓練では道路の中央を通ったが、本番では端を通ることになるし、雨なら路面が滑って難儀だろう。大雨が降る中、孫の家に避難した時は、歩くのも大変だった。自分の周りを見ても高齢者がとても多い。雨が降る前から、避難を始めないといけない＝社会福祉協議会福祉委員・田中啓子さん(74)



●防災士に若い力 昨年防災士になり、自主防災会で活動を始めたが、若者がいない。若者がもっと増えてほしい。土砂災害は局所的なので、住民が自分ごとにと捉えられず、なかなか防災が全体に広がらない。一番の課題は避難の始め方。誰がいつどう避難するべきか、考えたい＝自主防災会連合会会長・青木雄司さん(33)



●地域づくり大事 東日本大震災の語り部の話を聞き、知らないことがたくさんあった。震災と土砂災害をきっかけに2019年に防災士になった。地域には1人暮らしの高齢者や新住民が多い。防災はネットワークとコミュニティづくりを日頃から進めることが大事だと再認識した＝自主防災会連合会会長・寺尾幸章さん(69)



●イベント開催も 避難訓練で車いすの移動を支援した。実際に災害が発生したとき、車や徒歩で避難する人がたくさんいる中で、狭い道路を車いすで移動できるのか疑問に感じた。地域づくりの一環で、仲間と一緒に避難所開設時にも役に立つ足湯のイベントの開催を検討したい＝広島経済大3年・都はるかさん(21)



●初の車いす介助 車いすの避難介助をしたのは今回が初めて。歩道がでこぼこしていたり、敷地の出入り口に傾斜があったりして、バランスをとるのが難しかった。ブレーキの力加減もうまくできなかった。要配慮者の支援は日頃からの関わりが大事だが、なかなか接する機会がない＝広島経済大3年・北本峻也さん(21)



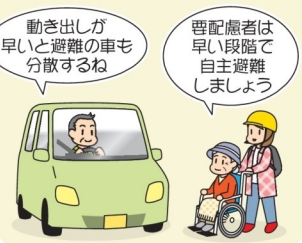
●初の車いす介助 車いすの避難介助をしたのは今回が初めて。歩道がでこぼこしていたり、敷地の出入り口に傾斜があったりして、バランスをとるのが難しかった。ブレーキの力加減もうまくできなかった。要配慮者の支援は日頃からの関わりが大事だが、なかなか接する機会がない＝広島経済大3年・北本峻也さん(21)

広島・山本学区

震災の教訓を土砂災害に生かす

事前の備え

地域で車避難のルールを決めておく



避難計画作りには多くの住民に関わってもらおう



警報解除まで安全な場所にとどまろう



できるだけ玄関先まで出る



災害発生時

監修 減災・復興支援機構

イラスト さとうあけみ



要配慮者の避難のサポートなど地域の備えについてアイデアを出し合う参加者＝5日、広島市安佐南区の山本集会所

安佐南区にある広島経済大は災害を知り未来へつなぐ「プロジェクト」で、学生が被災地支援や地域の防災活動に取り組み、訓練で車いすの人を介助した3年北本峻也さん(21)は「地域の人の役に立たいけれど、住民との接点がない」と打ち明けた。

助言者として参加した減災・復興支援機構専務理事の宮下加奈さん(53)は「若者が地域に活動する機会を増やしたい」と述べた。

活発な質疑応答に加え、参加者は広島市当地の「百歳体操」や、めだかグループの足腰体操を体験したほか、唱歌「ふるさと」を一緒に歌い、親交を深めた。

社会福祉協議会会長の小堀昭男さん(71)は「宮城の語り部と広島市の住民が自然災害という共通のテーマで気持ちを通わせ、防災の知恵を出し合った。体操のような何げない取り組みが防災に役立つと分かったので、活動をさらに進めたい」と決意を語った。

地域と学生が協力 大切



山本学区は近隣に二つの大学がある。昨今は近所付き合いが希薄になっているが、住民と若者が対話を重ね、安心安全に住みやすい街を実現してほしい。

避難訓練は、いろんなケースを想定して小規模で実施し、そのたびに反省会で情報を積み重ねることが大切だ。大学も避難所に指定されている。学生が運営計画を作った災害FMのほかに、校内の大型スクリーンで映画上映や、広い教室でレクリエーションをするなど、教員も巻き込んだ楽しい避難所として機能させようと取り組んでいる。今回参加した「災害を知り未来へつなぐプロジェクト」の学生たちは防災活動を通して、地域に貢献したいと真剣に考えている。防災に限らず、日頃からいろんな活動で地域と学生が連携することが大事だ。若い子育て世代も巻き込むような仕組みも考えた。

後藤 心平さん(48)

自ら体験し行動を検証



減災・復興支援機構専務理事の宮下加奈さん(53)は「若者が地域に活動する機会を増やしたい」と述べた。

天気の良い日中の避難訓練だったが、雨が降ればリスクが増える。街灯が少ないことも気になった。道路わきに庭用のソーラライトを設置してはどうか。土砂災害の危険性が低い場合、避難先は近くの公民館や集会所でもいい。福祉施設などと相談して、受け入れてもらう方法も。民間同士で話をした方がうまくいく。工夫して、避難を楽しむ文化を根付かせてほしい。雨が降りそうだったら、弁当と着替えを持って一晩過す。集まるのが楽しければ、交流も生まれる。大事なのは、避難をためらわず、早めに行動すること。避難所はゴールではなく、再建のスタート地点だ。

宮下 加奈さん(53)



QRコードで接続すると、むすび塾参加者が唱歌「ふるさと」を斉唱する動画を見ることが出来ます。

いのちと地域を守る



2014年8月20日の土砂災害の教訓を子どもたちに伝えようと、むすび塾に参加した坂本牧子さんが代表を務める子育てサークル「Mamaはつげ」(広島市安佐南区は紙芝居「なっちゃんの手紙」)を作った。

紙芝居 教訓次世代に

「みんなでおらんと、なんかこわいよ」と連れ出した。

犠牲2児の母が原案 早期避難の大切さ訴え

紙芝居は12枚で、ストーリーの原案は、山本地区で土砂災害の犠牲となった平野通大君(当時11)と、都野ちゃん(当時2)の母親が作った。

紙芝居の連絡先は広島市安佐南区社会福祉協議会082(833)5011。

東日本大震災をはじめとする自然災害の被災体験を振り返り、防災の教訓や課題を考えてみませんか。町内会や学校、職場など少人数の集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は河北新報社防災・教育室022(211)1591。



車いすで避難所まで移動しながら、介助の仕方や危険箇所を確認した＝5日、広島市安佐南区山本3丁目

◆経路話し合った 移動に思ったより時間がかかり、早めに行動することが大事だった。膝が悪く、自分の足を気にしながら、孫にも気を配って歩くのは大変だった。事前に経路を家族で話した。途中で以前、浸水した場所がある。雨の状況によっては、坂の上の神社に避難したい＝青少年健全育成連絡協議会会長・谷口正行さん(74)

◆速さ考え歩いた これまで避難したことはない。おじいちゃんの家から山本小までは遠くて疲れちゃった。おじいちゃんが遅かったの、先に行かないように速さを考えながら歩いた。本当に避難所に行くことになったら、転ばないように注意して、車にも気を付けて避難したい＝広島市春日野小2年・宇江田夏芽さん(8)

◆余裕持ち行動を 近所には足の不自由な高齢者が住んでいる。今回は車いすで避難したが、道幅が狭く、予想よりも時間を要した。災害時の悪天候を想定すると、さらに時間がかかるだろう。高齢であればあるほど、余裕を持った早めの避難が大切だと身をもって感じた＝社会福祉協議会監事・小島嘉徳さん(76)

避難訓練に参加して

住民と学生 ミニ避難訓練

ミニ避難訓練は、車いす利用者の住民と介助者役の広島経済大2人のグループと、小学生の孫と祖父のペアがそれぞれ、自宅から指定避難場所の山本小を目指した。語り合いに参加する住民ら約30人も同行し、見守った。

広島経済大3年の北本竣也さん(21)と都はるかさん(21)は、社会福祉協議会監事の小島嘉徳さん(76)が乗る車いすを補助し、500メートル離れた山本小に向かった。

北本さんは車いすを押し、都さんは道路や側溝など周囲の状況を伝え誘導した。まずは自宅から続く下り坂。転倒を防ぐため、北本さんが進行方向に背を向けて後ろ向きで車いすを移動させた。

平らな道では車いすを前向きに方向転換。両脇のふたの側溝や、マンホールと排水溝の段差にも注意を払った。都さんは地図を持ち、進行方向や車の位置を確認しながら進んだ。

青年健全育成連絡協議会会長の谷口正行さん(74)は孫の春日野小2年宇江田夏芽さん(8)と、先の山本小に移動した。坂の途中にある家を出た後、石垣やブロック塀、家の間を縫うような道を下った。2人がや



祖父と孫が石垣や塀に挟まれた狭い道路を下り、避難先の山本小に向かった＝5日、広島市安佐南区山本3丁目

時間、体力、経路… 注意点次々と

つと通れる幅の狭い道では、ふと伝え、孫に注意を促した。たの側溝に気を付けた。道が狭い通りになると歩道がなくなり、急な下り坂も。夏芽さんは膝が悪い祖父の足を助けて、速さを調整するように歩いた。約19分、山本小に着いた。谷口さんは「歩いた経路の中に以前、水があふれたところもある。どこが安全なのか考えないといけない」と語った。

土砂災害 繰り返し発生 広島・山本



長雨で発生した土砂災害により、住宅街に押し流された樹木と車＝2021年8月、広島市安佐南区山本6丁目

広島市安佐南区の山本地区は近年、繰り返し土砂災害に見舞われている。2014年8月20日未明、広島市の安佐南、安佐北両区を記録的な豪雨が襲った。広範囲で土砂崩れや土石流が発生し、多くの住宅が被害を受け、市内で75人が亡くなった。山本地区でも山本小5年の平野通大君(当時11)と都野ちゃん(当時2)の兄弟が犠牲になった。

21年は8月11日から前線の停滞が引き、広島市は長雨となった。14日には山本地区の2カ所で土石流が発生。犠牲者はなかったものの、住宅や農地に土砂が流入し、大きな被害を受けた。山本地区近くの雨量計によると、1時間雨量はそれほど多くなかったが、12、25日の積算雨量は79.3ミリに達し、広島市内で最大だった。

いずれの豪雨災害でも、山本小に避難所が開設され、地域住民が避難した。

東日本大震災の語り部から

住民 普段から交流を

石巻市民生委員 現委員協議会副会長 蟻坂 隆さん(72)

要配慮者の避難を支援者が補助する八幡町の防災ネットワークを2004年に、町内会や民生委員が中心となって作った。地震は突然発生するため、支援者が地域に不在で、駆け付けすることができなかったケースがあった。

その時に感じたことは支援者だけに頼るのではなく、近所の住民同士が助け合える関係をつくること、大切だと思った。

私の町内ではハイキングやクリスマス会などで交流を深めてきた。年4回ほど防災訓練を行っていた。車いす利用者を4人で運んだ場合、時間がどれくらいかかるのかを検証しながら最善の方法を模索し、全員が車に乗り込む時間を10分ほど縮めた。

普段の生活では、利用者が防災を身近に感じる工夫をしていた。例えば、リハビリは「地震だー」の掛け声で始め、いすからすぐに立ち上がり、頭を守ったりする動きをしよう。

災害時は事前の準備が、避難の成否を左右する。訓練はもちろろん、日常の中に防災にも役立つことを取り入れ、災害への意識を根付かせ、落ち着いた行動につなげてほしい。

事前の準備 成否左右

めだかの楽校管理者 石山うみかさん(45)



「めだかの楽校」を含む「めだかグループ」の施設は東日本大震災の前、沿岸から400メートルの場所にあった。高齢者は避難に時間がかかるため、大きな揺れがあると直ちに避難すると決めていた。

震災発生直後も、警報を待たずに地震が収まると、すぐに車で避難を開始し、結果として利用者や職員、住民ら計87人を高台へ無事移動させることができた。事前に避難経路や場所を決めていたことが、素早い行動につながったと思う。

震災前は事前の準備が、避難の成否を左右する。訓練はもちろろん、日常の中に防災にも役立つことを取り入れ、災害への意識を根付かせ、落ち着いた行動につなげてほしい。



課題があっても、どうすれば乗り越えられるのか知恵を絞る。時には行政に提案することもある。災害は場所や人を選ばない。今回の経験が次の災害の備えにつながることを願っている。